日本古典文学研究における「交感」の概念

On the Idea of "Correspondence": Explorations into the Studies of Classical Japanese Literature

山田悠介
Yusuke YAMADA

Abstract: Although "correspondence" is considered one of the most important concepts in environmental literature studies, there is not much comprehensive research done on this subject by students of environmental literature. On the other hand, in the studies of classical Japanese literature, where "correspondence" is also regarded as an important concept, numerous works have been published on this theme. Nonetheless, this fact remains little known to students of environmental literature. One of the reasons for this neglect appears to be related to how the latter field was established: Environmental literature studies started in the United States in the 1980's. Consequently, scholars of environmental literature, including those in Japan, have been mainly interested in North American literature. Thus, little attention has been paid to classical Japanese literature from the perspective of environmental literature studies or ecocriticism. Against this background, this paper mainly focuses on the studies of classical Japanese literature and attempts to give an overview of how "correspondence" is studied in this field. That is, after briefly observing a general definition of "correspondence" in environmental literature studies, this paper moves to examine a few major theses concerning the theme in classic Japanese literature studies, especially as related to *Man'yōshū* (compiled in the 8th century, AD), so as to identify commonalities and differences between the two hitherto separately pursued disciplines from a comparative perspective.

1. はじめに

環境文学研究は、環境意識の高まりとともに1980年代にアメリカで始まった[1]。このような背景から、現在の環境文学研究の多くは、英米文学を主としており、日本文学を対象とした環境文学研究は周縁的な位置づけにある。数少ない日本の環境文学研究のなかでも、その対象は、石牟礼道子や森崎和江をはじめとした現代の作家に限定され、環境文学研究において日本の古典文学に焦点をあてた研究は、ハルオ・シラネのインタビュー（2007）にみられるように、一部の研究を除けばほとんど皆無といわざるをえない。

本稿では、環境文学研究における主要な概念の一つである「交感」の概念に関する文献調査の結果をまとめる。「交感」の概念は、主要な概念の一つとされているにもかかわらず、野田（2007）が指摘するように、総合的な研究はこれまでほとんど行われていない。本稿では、このような学問的状況を鑑み、今後の総合的な研究へ向けて、日本古典文学研究――とくに、万葉集研究――における「交感」の概念をとりあげ、環境文学研究において考えられている「交感」の概念と比較する。本研究は、文学作品などの一次資料を分析した交感論ではなく、「交感」に関する研究を対象にしたメタ研究の一環であると位置づけられよう。

2. 環境文学研究における「交感」

本章では、環境文学研究における「交感」の概念をみていく。山里（2008）は、「交感」について以下のように述べている。

> 〈交感〉という概念は元来アニミズムを基礎とするもので、人間と人間の外にある世界との間にある種の対応関係が存在するという考え方である。これは、精神世界と物質世界との間にもなんらかの対応関係を是認する考え方である。（山里，2008, p. 66）

山里（2008, p. 66）は、このように述べると同時に、「交感」するためには、「超越の瞬間」つまり、「対応する二者を分ける一線を瞬間的に越えていく契機」が必要不可欠であり、「超越」とは、「越えると同時に相互に他者として存在する自己と外界の瞬間的な合一を含むもの」をさすとする。

一方、野田（2007）は、「交感」を以下のように定義している。

> 人間と自然とのあいだに何らかの対応関係を見いだす感覚あるいは思考。その内容は、感覚的レベル、心理的レベルから民俗的、宗教的レベルまで多様だが、根底には人間と自然のあいだに連続性と関係性を見いだすコスモロジーがある。［中略］自然との交感という考え方は、欧米のロマン主義期（一八世紀から一九世紀）に成立したと考えられますが、それ以前からあった思想でもあります。（野田，2007, p. 152）

また別の論考で、野田（2003）は、「人と自然の間に何らかの対応関係を読みとる思想を動かす原理を、とりあえず〈交感〉（correspondence）の原理と呼んでみる」（p. 19）と述べ、具体的には、「〈自然〉は人間の心情や感情の状態に対応している」（p. 42）こと、「自然を見ることは〈私〉を見ること」（p. 57）を「交感」の概念としている。

こうしてみた場合、山里の述べた、人間と対応関係が存在する「人間の外にある世界」、「物質世界」を、野田は「自然」に限定して「交感」を定義していることがわかる。また、自然と人間の対応関係や、主客が合一することを環境文学研究では「交感」と呼ぶことが確認できた。

環境文学研究における「交感」の概念の定義についてみたところで、次章では日本古典文学研究における「交感」の概念をみていく。

3. 日本古典文学研究における「交感」

(1) 日本古典文学研究全体における「交感」

日本古典文学研究において、「交感」というタームは数多く使用されているが、本章ではまず、全体を俯瞰するかたちで日本古典文学研究において「交感」の概念を使用している論文をいくつか簡単にみていく。

日本古典文学研究における「交感」の全体像を把握するのに大きな手がかりとなると考えられるのは、雑誌『日本文学』1996年5月号に掲載されている、「特集・交感する古代」と題された一連の論文である。以下に掲載論文の題目をあげる。

①「交感することば：古事記の『見感で』と『見驚き畏み』」吉田修作
②「仏像の霊異：『日本霊異記』における〈交感〉の一面」武田比呂男
③「仏足石と仏足石歌：注釈としての歌」多田元
④「『蜻蛉日記』の歌・衣・性：歌う女／縫う女の〈物語〉」河添房江
⑤「弁少将の『歌声』：光源氏と『高砂うたひし君』」吉井美弥子
⑥「『隔て心なき』仲のかたち：光源氏と紫上の歌」今井久代　（掲載順）

以上から、上代から中古まで、幅広い時代にわたって「交感」の概念が適用され、論じられていることがわかる。上記の論文における「交感」ということばの使われ方は、①人間と神仏（仏像なども含む）との交感[2]、②人間と人間（男女）の交感、③自己と「内なる他者」の交感[3]、の三つに大きく分けることができる。少なくとも、これらの論文を見るかぎりでは、環境文学研究における「交感」のプロトタイプともいうべき「自然と人間の交感」の用法はなかった。

(2) 万葉集研究における「交感」1

本節と次節では、万葉集研究における「交感」の二つの用法についてみていく。まずは、柿本人麻呂の石見相聞歌の「らむ」に着目した研究である、小川（1999）をとりあげる。その論題名「人麻呂作品における想像力と交感：石見相聞歌の『――ラム』をめぐって」からもわかるように、ここでは、助動詞「――ラム」という文法から人麻呂作品における「交感」について論じている。では、ここでいう「交感」とは一体どういう意味で使われているのだろうか。

小川は、人麻呂の「石見の国より妻を別れて上り来る時の歌」（2巻131～137）における長歌の第三段、「夏草の念ひ萎えて偲ふらむ妹が門見む靡けこの山」の部分に、つぎのような注釈をつけている。

この表現は、夏草が生気を失うように、すっかりうちしおれて、門のところで〈われ〉が旅立った時のままに、〈われ〉の居るこの境界の山を見つめて、〈われ〉のことを思い慕っ

> ているであろう妻を見たいと、視覚的には捉えることのできない妻の、まさに今現在の姿と思いを想像するものである。注目したいのは、この表現において、ラムによって想像されているのが、〈われ〉を直接の対象とする妻の心であることである。しかもこの表現では「偲ふ」という直接的に妻の心情を表現する言葉を用いている。（小川，1999, p. 251）

小川（p. 252）は、この長歌の「――ラム」は、「自己と他者の境界を取り払い、〈われ〉が思慕するのと同じように、妻が〈われ〉を強く思慕していることを確信をもって想像する」ことをあらわしており、「自己の恋慕を表現する」ときに「他者の心を想像し、それを精細に描き出すことに徹することで、他者と自己との一体感を創出」し、「却って強く自己の思いを表現する」ことを可能にすると述べている。さらに小川は、人麻呂を「自己の心と他者の心の直接的な交感の表現を拓いていった」（p. 259）存在と位置づけている。

小川は、このように指摘したうえで、「――ラム」の用法について「交感」ということばを用いて以下のように述べている。少し長いが引用する。

> 同時という「現在」を強く意識しつつ、自己と他者との交感をめざす「――ラム」は『萬葉集』に固有の表現方法であった。交感的表現が『萬葉集』で広く定着したのは、なお自己と他者とを融合的に捉える人間感覚が息づいており、また詩的世界を構成する基点を“今、ここ”とする感覚が強く存在していたためであろう。［中略］人麻呂における交感的表現としての「――ラム」の創出は、自他の融合的な感覚を意識的に捉え直して、これを抒情のためかけがえのない方法としつつ、記載の表現力の高まりを駆使し「現在」という時間、表現の基点としての“今、ここ”を発見する営みであった。（小川, 1999, p. 265）［強調引用者］

以上の引用からわかるように、ここでは、自己と他者を「融合的」にとらえる感覚を表現する場合に「交感」ということばが使用され、人間同士の「交感」が論じられている。

(3) 万葉集研究における「交感」2

つづいて、万葉集研究における「交感」のもう一つの用法をとりあげる。すなわち、自然と人間の「交感」について論じたものである。

和田（1996）は、万葉歌人の自然観を「古代的象徴表現」（p. 50）と称し[4]、つぎのように述べている。

> 古代日本において、自然は景観として観照する対象ではなかったようである。一見、自然詠と思われる作品ですらも、自然の景物に人事を投影していることが少なくない。古代日本人は、自然の景物を人間の姿や心の投影としてながめ、自らを重ねながら見たことが、その表現を通して知られるのである。（和田，1996, p. 40）

この引用では、「交感」ということばは出てこないが、交感的思考を想定していることは明らかである。つづいて、上田（1983）の述べる万葉歌人像を引用する。

> 万葉集は大和地方を中心とする古代の風土が基盤となって、そこに生きる古代人のさまざ

> まな人間性がはつらつと歌いあげられた歌集である。万葉歌人にとっては生活の万端、たとえば旅の体験でも恋の情感でも、自然の現象と関連させて感受されることが多かった。この点、現代人の自然観とは質を異にするところで、古代人は深く自然のなかに生息して交渉をもっていたのである。いわば自然と自己の生とを未分化なもの、渾然一体のものとして体験していたのである。（上田，1983, p. 340）［強調引用者］

上田は、大西（1943, p. 145）がこうした万葉歌人の自然感情を、「交感的自然感情」と呼び、「人間の感情の内面的流動の姿そのものを、自然現象の直觀によって具象化せんとするもの」で、「これらの場合に於ける、わが萬葉人の自然觀照の仕方は、言はゞ人間の周圍の自然現象の中に、直に一種の感情の流動や氣分の揺曳の姿を觀じたものとも言へる」と述べていることを指摘している。大西の言う「交感的自然感情」が序歌[5]というかたちで詠じられると、「恋人をしのんだり、自己から離れていく恋人をなつかしむ感情が、そのまま山嶺を離れる雲に直結したり、岸辺に打ち寄せる波と一体化して歌われる」（上田，1983, p. 341）こととなる。

(4) 大西克禮の「交感論」

本節では、上田の言及する大西克禮（1888 − 1959）の「交感論」をとりあげる。東京帝国大学名誉教授で美学者の大西は、『万葉集の自然感情』（1943）において万葉集の和歌にあらわれる自然感情に深い関心を寄せ、西欧の文学作品と比較してその独自性を論じている。また、その後継書とされる『自然感情の類型』（1948）では、『万葉集の自然感情』の内容をさらに拡大し、万葉集だけでなく数々の日本古典文学作品を扱い、東西の自然感情について詳細な研究を行っている。大西は、「交感」について論じることを目的に執筆したわけではないであろうが、結果として、今日の環境文学研究が視野に入れている、「自然と人間の交感」について示唆に富んだ研究を行っている。

大西は、まず、自然感情には「主觀的自然感情」と「客觀的自然感情」の二つの類があるとし、以下のように述べている。

> 主觀的自然感情とは、自然に對する感情的反應及び共鳴が直接的であり、切實であつて、その主體の心琴に触れるところ（獨逸語の所謂 “Herzensanteil”）のある場合をいふのである。是に反して客觀的自然感情とは、主體の自我と自然の客體との間に、言はゞ一種の距離があり、又時にはその間に知的興味とか、功利的關心とかいふやうなものが介在して、その心的態度を客觀的ならしめてゐる場合を意味する。（大西，1948, p. 3）

つづいて、大西（1948, pp. 7-8）は、「美的意識の構造の觀點」から、上述の「主觀的自然感情」を三つの型に分類している。第一の型は、「自然に對する感情が、主として所謂『反應的感情』として働く場合」、第二の型は、「所謂感情移入作用によつて、主觀的感情が自然對象の中に投入され、觀照契機と感情契機とが完全に『融合』する場合」であり、これが「所謂『交感的』自然感情の型」に属すとしている。「所謂」と記していることから、大西は、以下に引用する第三の型も「交感的自然感情」の一つであるとみなしているようである。

> 更に第三は、感情そのものが、第一及び第二の場合の如き「情緒」の形をとつた明確なものでなく、所謂氣分情趣という如き、輪郭の定まらない漠然とした、もしくは縹渺たる趣

> を有すると共に、自然對象とのその結びつき方も、第二の場合のやうな緊密な「融合」ではなく、むしろただその周圍に揺曳すると云つたやうな、稍弛緩した關係であり、從つてそこに一種の「象徴性」が成立する場合（美学上の所謂氣分象徴或は情趣象徴に当る）である。（大西，1948, p. 8）

大西（1948, p. 9）は、一般に主観的自然感情の類型を代表し、典型とみなされるのは、「所謂『交感的自然感情』（Das sympathetische Naturgefühl）である」と述べている。

また大西（1948, 1988）は、「交感的自然感情」は、西欧と日本をはじめとする東洋とでは異なっていると説き、前者を「浪漫的―交感的自然感情」、後者を「素朴的―交感的自然感情」と呼んでいる。これは、双方の「自然感情の歴史」（大西，1988, p. 264）が異なっていることに由来するとし、以下のようにいう。

> 西欧においては、極く大体からいへば、元來異質的非美的の知的自然觀照の態度或は方向が、美的意識と結びつき、そして言はゞその中に摂取せられて、後者の本質的發展と共に徐々に成長し、その結果が自然体驗としての浪漫的美的形式に到達したとも見ることができる。然るにわが民族の如き場合にあつては、一般に文化そのものゝ根本的なる様式方向が、既に最初から知的方向よりも、むしろ美的方向に發達すべき素因を多分に有し、從つて自然体驗も亦比較的原初の段階から、既に一種の素朴な美的意識の形をとつて現れてゐるとも言い得る。（大西，1988, p. 263）

つまり、西欧においては、「古代の客觀的自然感情の類型が、近世の浪漫的主觀的自然感情の段階」（大西，1988, p. 262）へと発展したのに対して、日本では、主観的自然感情がはじめにあり、万葉集などで表現され、時代を経るとともに客観的自然感情へと発展していったという見方をしているのである。繰り返しになるが、大西は、東西のこうした違いから、「交感的自然感情」を前述の二つに区別しているのである。

以上、ごく簡単に大西の「交感論」をまとめたが、本稿では紙幅の関係上、その一部にしか言及できなかった。しかし、1943年という時期に「交感」について詳細な研究が行われていたことは、注目に値するであろう。今後、大西に関するさらなる調査が行われることによって、より幅広く「交感」を論じることができると考えられる。

最後に、日本古典文学研究における「交感」の概念の特徴をまとめれば、(1) 人間と「交感」する対象は自然だけではないこと、(2) 自他の「融合」や「合一」といったことばが共起することが多く、両者がこうした関係にある状態が「交感」であると考えられていること、の2点が指摘される。2点目について補足すれば、上述のように環境文学研究においては、「対応関係」が「交感」の要素としてあげられていたが、そうしたニュアンスはみられなかった。

5. まとめと今後の展望

ある概念が学問領域によって異なった位置づけ、ないし異なった意味づけをされていることは、決して珍しいことではない。本稿では、環境文学研究における「交感」の概念と、日本古典文学研究における「交感」の概念の用法と多様性についてみてきた。日本古典文学作品を対象とした研究で、「交感」の概念をキーワードとした論考を概観した結果、そこでは、環境文学研究にお

ける「交感」と共通する部分（自然と人間の「交感」）もあるが、環境文学研究では交感の対象とならない、人間と神仏や、人間同士の関わりも「交感」ということばでも論じられていることがわかった。日本古典文学研究の視点をとり入れた場合、「交感」を考えることは、自然と人間の関わり合いを考えることにとどまらず、神仏などの超越的な存在や、自分自身や自分以外の人間との関わりをもその射程に含むのである。こうしたさまざまな関わり合いが、いずれも「交感」という同一の概念でとらえられているということから、「交感」する対象が異なっていても、その成立には共通する源基が存在していると考えられる。その源基を探究することが、今後の「交感」研究の大きな課題のひとつである。また、「対応関係」と「融合」のように、両者が説明に用いたことばにズレがあったことも見逃せない。より多くの二次資料の検討とともに、じっさいの文学作品にあらわれる「交感」も分析する必要があると考えられる。

本稿では、これまでほとんど知られていなかった、大西克禮という美学者が東西の自然感情に関して1940年代から詳細な研究をつづけていたことも指摘した。本稿を出発点にして、当時のマクロコンテクストにおいて大西の一連の研究がどのような意味をもっていたのか、環境文学研究が隆盛を見せ始めた今日において、彼の研究がどのように位置づけられるのか、といった問題にも今後取り組んでいきたい。

本稿ではふれることができなかったが、日本の交感論を論じるうえでは、「交感」の翻訳の問題も非常に重要であると考えられる。「交感」は、英語 “correspondence” の翻訳であると一般には理解されているが、“correspondence” は、「交感」だけでなく、「照応、呼応、感応」（野田, 2007, p. 152）と翻訳される場合もある[6]。それぞれの日本語がどのような意味範疇をもっているのか、どのように使い分けられているのかを問うことで、交感の概念を明確にすることへの一助となるであろう。

「交感」に関する研究は、まだ始まったばかりであるが、これは、未来に向けた自然と人間のコミュニケーションの可能性を追究する研究であると同時に、過去における自然と人間のコミュニケーションのかたちをわれわれに示す研究でもある。今後も、多角的な視野から「交感」について調査、研究する必要があると考えられる。

註

1 環境文学研究の起源については、野田（2003）、生田・村上・結城（2008）などを参照。

2 武田（1996, p. 19）は、「〈交感〉とは、神や仏など霊的なものと人間との、言語や祭祀そのほかによる、必ずしも意図的なものに限らない交渉・伝達のあり方」と述べ、同じく『日本霊異記』について論じた小峰（2008, p. 101）は、「前近代では『交感』よりも『感応』の方が一般的であり、『応験』などもほぼ同義で、『霊験』もこれにかさなる」と指摘している。

3 「自己と内なる他者の交感」は、川添（1996）における用法である。

4 なお、和田（1996, p. 54）は、山崎（1972）も「古代的象徴表現」というタームを使用していることを指摘している。

5 序歌の定義については諸説あるが、上田（1983, p. 388）によれば、「自然物の描写の部分と、作者の心情を表現する部分の二部分から一首が構成され、その両部分が融和呼応」しながら「一つの詩的世界を形成する詠歌形態」とされる。序歌の定義の多様性については、上田（1973, 1983）などを参照。

6 『三田文学』1951年8月号と同年9月号で行われた、佐和（1951）と佐藤（1951）によるボードレールの「correspondance」（作品4）の翻訳論争などは、非常に興味深い。「交感」の翻訳に関しては、他日を期したい。

参考文献

生田省悟・村上清敏・結城正美（編）(2008).『「場所」の詩学―環境文学とは何か』藤原書店.
今井久代（1996).「『隔て心なき』仲のかたち：光源氏と紫上の歌」『日本文学』第 45 巻，第 5 号，55-64 頁.
河添房江（1996).「『蜻蛉日記』の歌・衣・性：歌う女／縫う女の〈物語〉」『日本文学』第 45 巻，第 5 号，32-43 頁.
小峯和明（2008).「神仏との交感：感応と霊験の物語」『水声通信』第 24 号，101-107 頁.
野田研一（2003).『交感と表象：ネイチャーライティングとは何か』松柏社.
野田研一（2007).『自然を感じるこころ：ネイチャーライティング入門』筑摩書房.
小川靖彦（1999).「人麻呂作品における想像力と交感:石見相聞歌の「一ラム」をめぐって」稲岡耕二（編）『声と文字：上代文学へのアプローチ』(249-270 頁). 塙書房.
大西克禮（1943).『万葉集の自然感情』岩波書店.
大西克禮（1948).『自然感情の類型』要書房.
大西克禮（1988).『東洋的藝術精神』弘文堂.
佐藤朔（1951).「『照應』と『交感』」『三田文学（第二期)』第 41 巻，第 5 号，38-39 頁.
佐和濱次郎（1951).「ボオドレエルの詩の飜譯について」『三田文学（第二期)』第 41 巻，第 4 号，20-26 頁.
Sirane, H.・海野圭介（2007).「インタビュー　エコクリティシズムと日本文学：コロンビア大学ハルオシラネ教授に訊く」『國文学：解釈と教材の研究』第 52 巻，第 6 号，118-132 頁.
多田元（1996).「仏足石と仏足石歌：注釈としての歌」『日本文学』第 45 巻，第 5 号，21-31 頁.
武田比呂男（1996).「仏像の霊異:『日本霊異記』における〈交感〉の一面」『日本文学』第 45 巻, 第 5 号，10-20 頁.
上田設夫（1973).「万葉序歌の成立」『萬葉』第 81 号，6 月号，37-48 頁. 萬葉学会.
上田設夫（1983).『万葉序詞の研究』桜楓社.
和田明美（1996).『古代的象徴表現の研究』風間書房.
山崎良幸（1972).『万葉歌人の研究』風間書房.
山里勝己（2008).「アメリカン・サブライムとエコロジカル・サブライム：エマソン、ホイットマン、スナイダーの〈交感〉表象」『水声通信』第 24 号，66-75 頁.
吉田修作（1996).「交感することば:古事記の『見感で』と『見驚き畏み』」『日本文学』第 45 巻, 第 5 号，1-9 頁.
吉井美弥子（1996).「弁少将の『歌声』：光源氏と『高砂うたひし君』」『日本文学』第 45 巻，第 5 号，44-54 頁.